

自他理解の深まりと仲間意識を高める自己プレゼン

——令和2年度秋学期・令和3年度春学期及び秋学期における 「特別活動及び総合的な学習の時間の指導法」の 授業を振り返って——

山本 信幸*

キーワード：自他理解、自己実現、自己有用感、互いのよさや個性、
仲間意識、仲間づくり、特別活動における学習指導要領の趣旨、
学生アンケートの分析と授業感想、授業内で仲間づくり、
自己プレゼンの効果

「特別活動及び総合的な学習の時間の指導法」のうち、「特別活動の指導法」において、特別活動の視点である自己実現と人間関係形成の重要性を学ばせることをめざし、自己紹介プレゼンテーションを授業内で実施している。その実践を通して、自他理解の深まりと仲間意識の高まりを図ることができたかを検証する。

「自己実現」の観点では、自己紹介プレゼンテーションを作成することで自他理解を深め、その発表から互いのよさや個性を理解し合わせる。「人間関係形成」の観点では、プレゼン発表から学生同士が互いのよさや個性を知り合い、仲間意識の高まりから仲間づくりの楽しさを味わわせる。

本稿では、学生のアンケートの分析と授業感想から自己紹介プレゼンテーション（自己プレゼン）の効果について論じる。

はじめに

義務教育現場の実務経験者として、学生への指導を担当して5年目。令和3年度の授業担当に「特別活動及び総合的な学習の時間の指導法」がある。本稿では、「特別活動の指導法」で実践している学生による自己紹介プレゼンテーション（以下、自己プレゼンと称する）の実態を紹介し、学生アンケートと授業感想の分析からその効果を検証する。

大学の授業を担当して気になったことが、授業内において孤独を感じていると推察される学生の存在である。本学の教職履修は、他学部他学科の学生と共に受講するため、学生

*やまもと のぶゆき 教職支援センター 本学非常勤講師

同士の関係が希薄である。義務教育現場に勤務していた際、仲間づくりを学級経営の柱として実践を積み重ねてきたこともあり、孤独を感じる学生をなくしたい思いが強くなった。そこで、授業内で自己プレゼンをさせれば、学生同士の関わり合うきっかけになるだろうと考えた。

本稿で述べる「自己プレゼン」とは、授業で学生が自己紹介のために作成したスライドをプレゼンテーションする活動のことであり、筆者が命名したものである。発表する学生には、自己紹介を聞き手に分かりやすく伝えられるよう、自宅学修として PowerPoint のスライド作成をさせる。聞き手となる学生には、発表者の人物像をとらえ、同じ授業を履修する者同士の絆づくりへの足掛かりとするよう助言する。こうした活動から自他理解を深めることが、人間関係形成の礎のひとつとなることを学生に学ばせたい。

本稿は、令和2年度秋学期（日進 Campus・29名）の対面授業、令和3年度春学期（日進 Campus・109名）の対面授業とオンデマンド授業、令和3年度秋学期（日進 Campus・11名）の対面授業、令和3年度秋学期（名城公園 Campus・6名）の対面授業で行われた「特別活動及び総合的な学習の時間の指導法」のアンケート分析（任意提出された人数記載）と授業感想から「自己プレゼン」の効果について論じる。

1 「特別活動の指導法」を担当するに当たり

(1) 学習指導要領の趣旨をふまえて

中学校学習指導要領解説・特別活動編の付録3の第3の1の(1)で、特別活動における生徒の主体的・対話的で深い学びについて、以下のように示している。（以下、下線は筆者による）

特別活動の各活動及び学校行事を通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること。その際、よりよい人間関係の形成、よりよい集団生活の構築や社会への参画及び自己実現に資するよう、生徒が集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ、様々な集団活動に自主的、実践的に取り組む中で、互いのよさや個性、多様な考えを認め合い、等しく合意形成に関わり役割を担うようにすることを重視すること。

ここで述べている「互いのよさや個性、多様な考えを認め合い」とは、合意形成を図る場合に、他者の考えを認め、自他の考えをつないで、新たな考えや価値の創造を生み出す

ために必要な資質・能力といえる。

また、中学校学習指導要領解説・特別活動編の付録3の第2の2の(3)ウで、特別活動の視点である自己実現について、以下のように示している。

目標をもって、生き方や進路に関する適切な情報を収集・整理し、自己の個性や興味・関心と照らして考えること。

ここで述べている「自己の個性や興味・関心」とは、自分がどのような人物なのかを客観視できる活動を通し、自己存在感や自己有用感を自覚することで育つものであり、自己の将来像を描こうとする自己実現に通じることを示している。

さらに、中学校学習指導要領解説・特別活動編の付録3の第2の(2)アで、特別活動の視点である人間関係形成について、以下のように示している。

自他の個性を理解して尊重し、互いのよさや可能性を發揮しながらよりよい集団生活をつくること。

ここで述べている「自他の個性を理解して尊重し」とは、自他の個性を見つめ合い互いに大切にすることで、自己有用感の高まりと他者の個性理解と多様な価値観の気づきとなり、豊かな人間関係の構築に通じることを示している。このように、学習指導要領が示す「互いのよさや個性、多様な考えを認め合い」、「自己の個性や興味・関心」、「自他の個性を理解して尊重し」の具現化が、特別活動の育成すべき資質能力である。

2 研究の仮説と目標

(1) 研究仮説

学習指導要領の趣旨を受け、授業内で「互いのよさや個性、多様な考えを認め合い」、「自己の個性や興味・関心」、「自他の個性を理解して尊重し」を具現化する活動として自己プレゼンを取り入れるための研究仮説を以下のように設定した。

自己プレゼンを「特別活動及び総合的な学習の時間の指導法」の授業内で行うことにより、自他理解の深化、自己有用感の向上、仲間意識の高まり、仲間づくりの楽しさを図ることができ、特別活動で育成すべき資質・能力となる「自己実現」と「人間関係形成」の意義をとらえることができるであろう。

(2) 研究目標

研究の仮説を受け、自己プレゼンを行う上での目標を次のように考えた。

- ①自宅学修の課題として取り組ませることができる。
- ②生い立ち、趣味、特技、生活ぶり、将来展望などを振り返ったり考えたりした内容と聞き手に伝わりやすい発表の工夫をすることで、自他理解の深まりや自己実現を図ろうとする意欲を高めることができる。
- ③聞き手の学生の共感を得たり新たな人間関係を築いたりすることで、自己有用感を高めることができる。
- ④他者理解をすることで、仲間づくりのきっかけとすることができる。
- ⑤教職をめざす仲間として、互いに理解や尊重し合う気持ちがあわき、仲間意識をもつことができる。

これら5つの目標は、自己プレゼンから期待できる効果として設定した。

3 「特別活動の指導法」の授業内容

(1) 「特別活動及び総合的な学習の時間の指導法」のシラバスから

○授業の概要

総合的な学習の時間は、①アクティブ・ラーニングの推進に相応しい教育活動、②全教科、領域の教育活動と横断的総合的に関わる、③自己の生き方を探求するキャリア教育に深く関わる、④SDGsの観点から課題解決に関わる、ことを学ぶ。特別活動は、①学級経営の充実に貢献、②生徒指導の中核的な活動、③道徳教育の推進に役立つ、④キャリア教育、人権教育、命の教育などの教育活動に期待されている、ことを学ぶ。

総合的な学習の時間を学ぶ授業は3回行う。特別活動3分野（学級活動・ホームルーム活動、委員会活動、学校行事）のうち、学級活動を重視し、特別活動の授業は11回行う。第15回に総合的な学習の時間と特別活動のまとめを行う。

自己プレゼンの発表、自己理解を兼ねたクレペリン検査、保育園か中学校の参観、教員採用試験の小論文を意識した課題を実施する。

本稿では「特別活動の指導法」について論じるが、履修者が多い場合は、「総合的な学習の時間の指導法」の授業時間にも発表時間を設定している。保育園か中学校の参観については、コロナ感染の影響で令和2・3年と実施を控えている。令和元年度は日進北部保

育園参観を実施した。令和4年度は新型コロナウイルス感染症の影響によりすべて中止となった。クレペリン検査（数年前まで愛知県教員採用試験で採用）は、採用されていたその意図を理解させる点、診断結果から自己理解を深めさせる点というふたつの目的のために実施している。また、自己プレゼンは評価対象として、成績の10%を配分している。

○授業の到達目標

- 1 学習指導要領から、総合的な学習の時間における内容の取扱をとらえ、アクティブ・ラーニングを推進させる活動との関わりの深さを理解できる。
- 2 学習指導要領から、特別活動に期待されていることや特別活動の充実により、人間関係形成、社会参画、自己実現への資質と能力を育成できることをとらえ、その理解を深めることができる。
- 3 アクティブ・ラーニングを取り入れた担当教員による模範授業や体験的活動（自治的レク活動、自己プレゼン）等から、座学ではなく自ら学ぶ喜びとやりがいを実感できる。
- 4 子供の実態把握や自治的な活動を行うことが、いじめや不登校の防止、望ましい集団形成、学力の向上に通じることを理解できる。
- 5 総合的な学習の時間と特別活動の充実が、自らよりよい生き方を探究するキャリア教育の推進に通じることをとらえ、その理解を深めることができる。

本稿と関わりのある到達目標は2と3である。目標2にある人間関係形成と自己実現の視点は、自己プレゼンの発表を通して、その重要性を実感させる。目標3にある自治的レク活動とは、グループごとに考えたレクリエーション活動を通し、自ら企画運営する喜びや仲間づくりの楽しさを体験させる。

(2) 自己プレゼンの実施方法

以下の5点をふまえて、自己プレゼンを実施する。

- ・授業開始から一人5分以内で最大5名以内の発表の場を設定する。
- ・事前に発表する順番を告知し、自宅学修の課題（原則 PowerPoint で作成）とする。
- ・PowerPoint のスライドは、文字だけでなく写真などの画像を加える。
- ・自他理解ができるよう聞き手に分かりやすく伝える工夫や話し方をする。
- ・作成した自己プレゼンを USB に保存し、発表当日の授業に持参するか、事前に Teams の筆者のチャットへ送信する。

(3) 自己プレゼン事例 (個人が特定できる箇所は筆者で修正削除)

- ① 1～6 心身科学部健康科学科2年A (対面授業での発表)
- ② 7～12 心身科学部健康科学科2年B (オンラインでの発表)
- ③ 13～18 心身科学部心理学科2年C (対面授業で発表)
- ④ 19～24 商学部商学科3年D (対面授業で発表)
- ⑤ 写真 文学部歴史学科2年E (対面授業で演奏)

①心身科学部健康科学科2年A



1



2



3



4



5



6

【①1～6 心身科学部健康科学科2年A】

小学生時代の思い出として、野球で当時小学生であった根尾昂（現中日ドラゴンズ選手）さんの所属したチームと試合対戦、将棋で藤井聡太さん（五冠達成）と対決した発表をした。学生たちの驚きの声に、Aは「たまたまのこと、いたって普通の人間です。仲良くしてください」と、淡々と発表した。

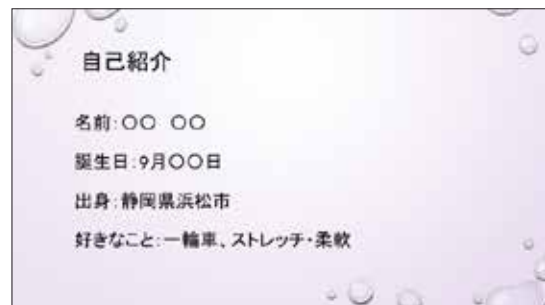
【②7～12 心身科学部健康科学科2年B】

浜松市出身のBは、高校時代の一輪車全国大会出場を動画で紹介した。この発表はオンラインであったため、学生の反応が分からなく、発表者だけでなく筆者も残念に思った。動画を取り入れた発表のひとつとして印象に残っている。

②心身科学部健康科学科2年B



7



8



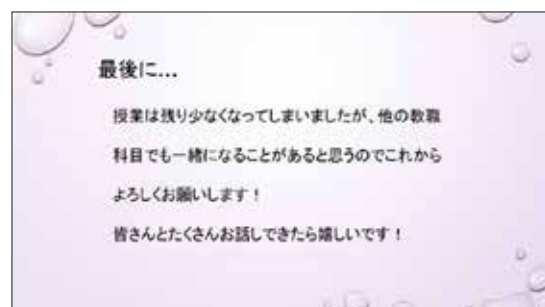
9



10



11



12

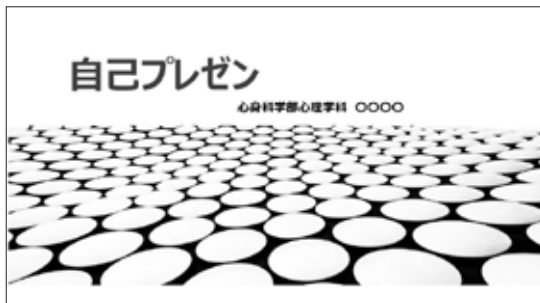
【③13～18 心身科学部心理学科2年C】

生い立ちと今後の自分を語ったCは、法学部から心身科学部への転部理由、特別支援学校の教師を目指す理由を分かりやすくまとめて発表した。教職をめざす信念が伝わり、学生たちに教職履修した初心を見つめ直させるきっかけとなった。

【④19～24 商学部商学科3年D】

発表内容やスライド構成の最も多い発表パターンがこのDの発表である。しかし、Dの説得力のある語り方が学生たちに好評であった。発表内容だけでなく、人に分かりやすく伝える必要性やコミュニケーション能力、話術も自己プレゼンに必要な能力であることを学生たちに再認識させた。

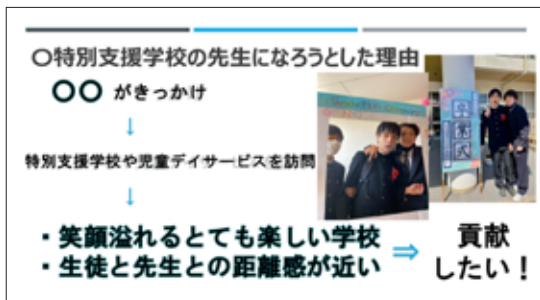
③心身科学部心理学科2年C



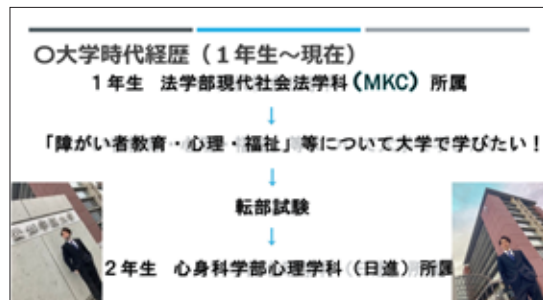
13



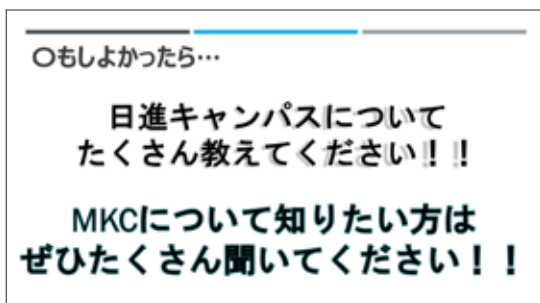
14



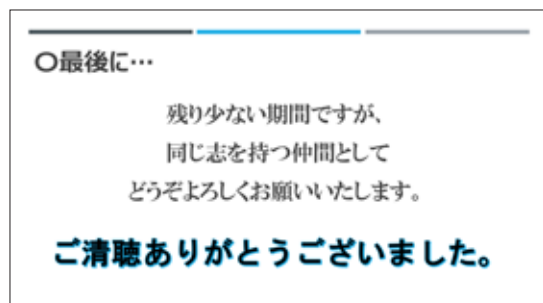
15



16



17



18

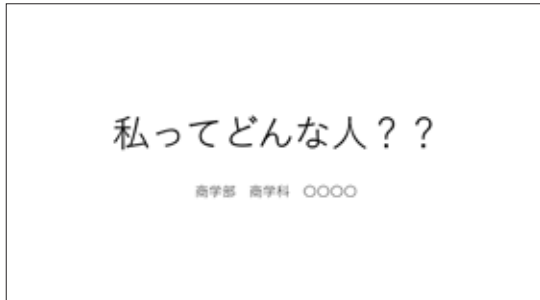
【⑤写真(右) 文学部歴史学科2年E】

Eは毎回の授業にギター持参で出席していた。その理由は、授業後に駅前で路上ライブをするためであった。Eの自己プレゼンは自作曲の披露であった。「Eが自己表現している姿は、とても生き生きと輝いていた」という授業感想を残した学生がいた。このような実演型発表は他にも「ボランティア活動で行っているバルーン風船づくりの実演」、「高校時代にバトン部で習得したバトントワリング実演」があった。



Eの演奏と歌による自己プレゼン

④商学部商学科3年D



19



20



21



22



23

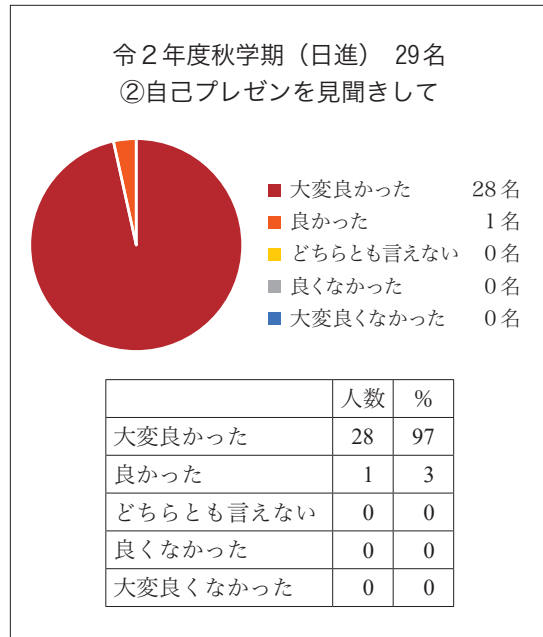
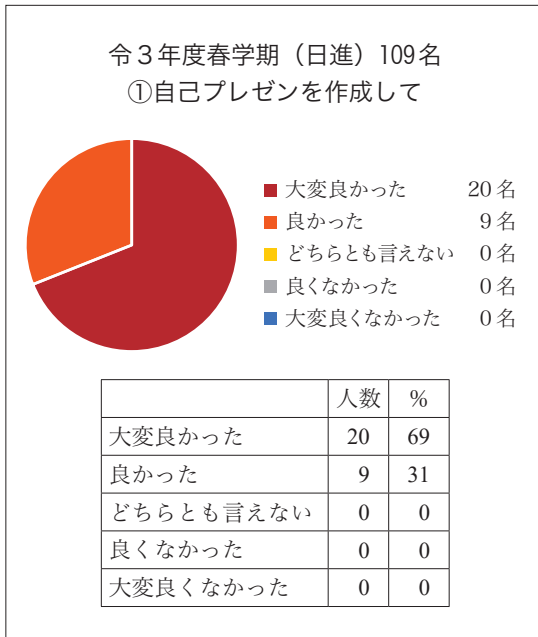


24

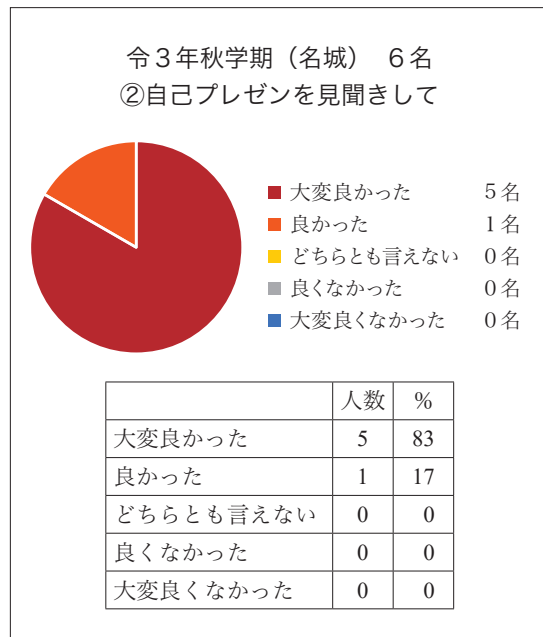
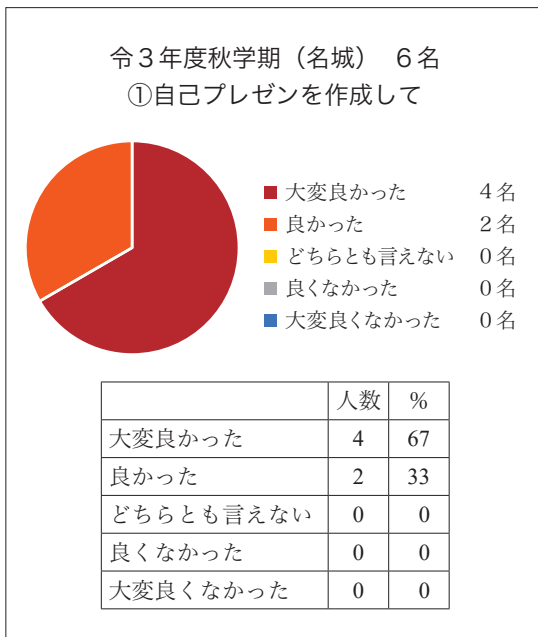
3 学生のアンケート調査結果

15回の授業を終えた自己プレゼンアンケートは、筆者の授業改善、回答内容は授業の成績と無関係、提出は任意、という3点を学生に伝えて実施したものである。

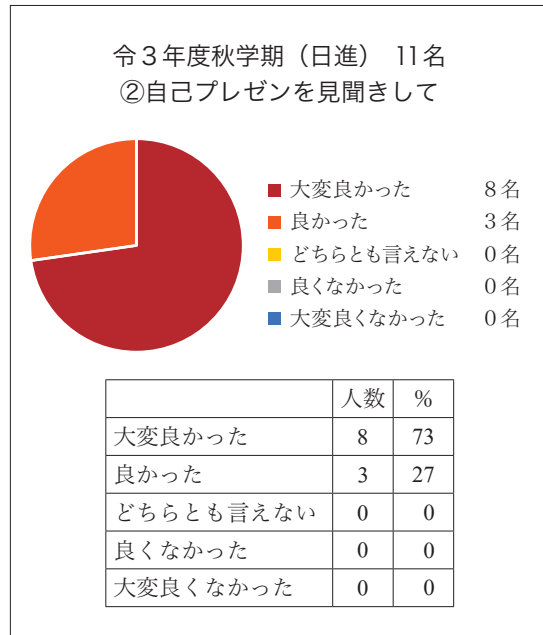
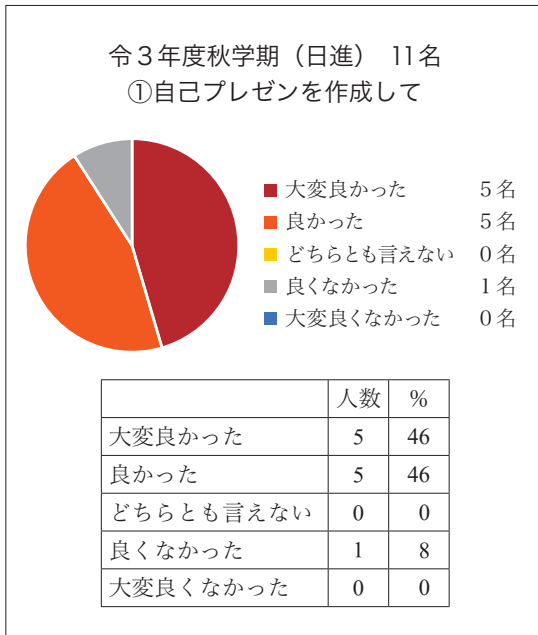
【アンケート1】



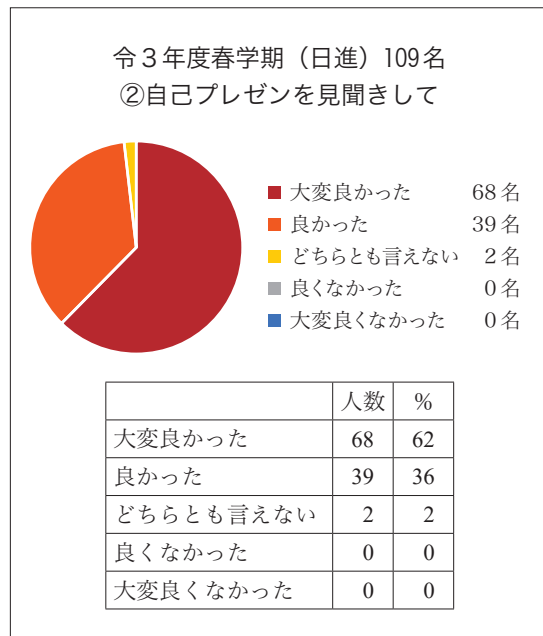
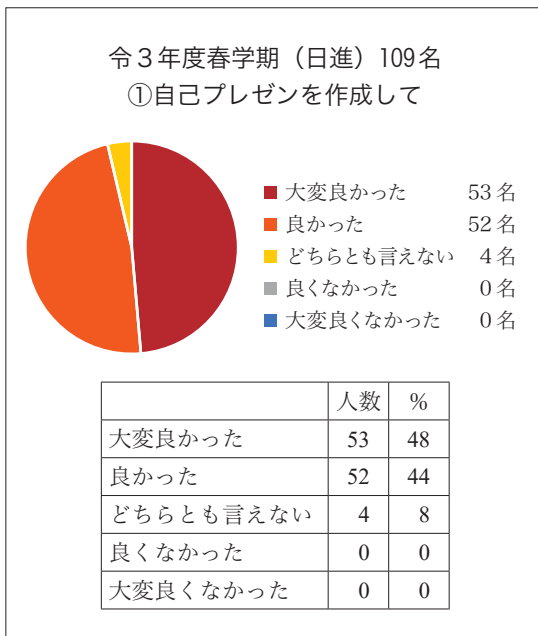
【アンケート2】



【アンケート3】



【アンケート4】



4 アンケート結果の分析（アンケート1・2・3の授業は対面授業15回、アンケート4の授業は対面授業11回とオンライン授業4回）

(1) 「自己プレゼンを作成して」の項目

「大変良かった」と「良かった」の合計では、アンケート1・2で100%、アンケート3・4で92%であった。この結果は、仮説の正当性を裏付けるものである。学生の回答比率と主な理由は、以下の通りである。

	アンケート1	アンケート2	アンケート3	アンケート4
大変良かった	69%	67%	46%	48%
良かった	31%	33%	46%	44%
その他	0%	0%	8%	8%

○「大変良かった」主な理由

- ・自己表現の大切さ（自己表現能力を上げることを学ぶことができたから）。
- ・どう作成すれば皆の心に残るのかとか目立つのかを考えることが楽しかった。
- ・自分の趣味などを発表して、共通の友達を見つけることができたから。
- ・教育実習や就活にも活きたと思ったから。

○「良かった」主な理由

- ・自分が経験してきたことから自分を見つめ直すことができたから。
- ・みんなに自分のことを知ってもらい、その反応が嬉しかったから。
- ・発表後に話しかけてもらえたから。
- ・自分のことを相手に知ってもらえるチャンスがあったから。

○「どちらとも言えない」と回答した4名の理由

- ・オンラインでの発表だったので、周りの反応が見えなかったから。
- ・時間がなくて自己満足できるものができなかったから。
- ・話しきれなかったこと。
- ・今考えてみると、もう少し工夫すれば良かったと思うから。

○「良くなかった」と回答した1名の理由

- ・皆のすばらしい発表を見聞きして、もっとこうすればよかったと反省したから。

「どちらとも言えない」と「良くなかった」と回答した5名の理由は、自分の発表への反省、オンラインによる反応の手ごたえのなさであり、自己プレゼンを否定的にとらえているのではなく、発表者の自己プレゼンから自分の自己プレゼンを見つめ直し、自分なり

にさらに良くしたいという反省や向上心からの回答であった。

(2) 「自己プレゼンを見聞きして」の項目

	アンケート 1	アンケート 2	アンケート 3	アンケート 4
大変良かった	97%	83%	73%	62%
良かった	3%	17%	27%	36%
その他	0%	0%	0%	2%

「大変良かった」と「良かった」の合計は、アンケート 1・2・3 で100%、アンケート 4 で98%であった。この結果は、(1) の結果以上に仮説の正当性を裏付けるものである。学生の回答比率と主な理由は、以下の通りである。

○ 「大変良かった」主な理由

- ・ 大学では自分から話しかけないと、多くの人のことを知れないので良い機会だった。
- ・ 人の話をよく聞くことを習慣化することができたから。
- ・ 席の前後左右、レク活動で同じ班の人のことも知れて、友達の輪が広がったこと。

○ 「良かった」主な理由

- ・ 途中からオンラインになってしまったのが残念だった。
- ・ 新しい友人ができるきっかけになったから。
- ・ 自分と違う考えを聞くことができたから。
- ・ 新しい友達が作れ、前からの友達をより深く知ることができたから。

○ 「どちらとも言えない」と回答した 2 名の理由

- ・ コロナの影響で対面で直接見聞きできなかったプレゼンがあった。
- ・ 最後のプレゼンの発表後にグループごとに集まったけれど、もっと話したかった。

「大変良かった」と回答した学生の割合が (2) の項目のほうが (1) の回答項目よりも顕著に高かった。このことから、学生に仲間づくりのきっかけの場として役立っていることが分かる。「友達の輪が広がった」「新しい友人ができるきっかけ」という回答理由にあるように、他学生への興味関心は高く、発表後に自然と関わっていく学生もいた。また、「どちらとも言えない」という回答理由から、オンラインよりも対面での発表を望んでの回答理由であり、(1) と同様に自己プレゼンを否定的にとらえているのではなく、効果をより高める発表の仕方やあり方を考えているからである。

5 仮説の検証

【検証①自他理解の深まり、自己有用感の向上、仲間づくりの楽しさ、仲間意識の高まりを図ることができたか】

15回の授業を終えた学生（心身科学部2年F）の感想の抜粋（自己プレゼンを振り返った記述箇所）から検証する。

自己プレゼンにおいて、自分のスライドを作っている中で、私は今まで何をしてきたのか、周りからどう思われていたのかなどを改めて振り返ることができました。また、他の人の自己プレゼンでは、私の知らない分野の趣味、地元について、アルバイト、性格についてなどを、知ることができました。もっと様々な分野に興味を持ちたいと感じました。さらに、今まで同じ講義を受けていた全員のことが知れて、仲良しになれてうれしかったです。

「私は今まで何をしてきたのか、周りからどう思われていたのか」では、これまでの自分を振り返ることで、自他理解をより深くし、自己存在感を自問自答しながら高めようとしていることが分かる。「もっと様々な分野に興味を持ちたい」では、生き方をさらによりよくしようと考え、自己有用感を高めたことが分かる。「全員のことが知れて、仲良しになれてうれしかった」の箇所からは、仲間意識を高めたことから仲間づくりができた満足感をもてたことが分かる。

また、アンケートの「自己プレゼンを作成して」の回答理由にある「自分が経験してきたことから自分を見つめ直すことができたから」からは、自己理解の深化につながっていることが分かる。「みんなに自分のことを聞いてもらい、反応してもらえることが嬉しかったから」からは、自己有用感を高めた喜びを表現している。「自分の趣味などを発表して、共通の友達を見つけることができたから」では、自他理解を深めたことから仲間づくりのきっかけとしたことが分かる。

これらの感想からも、自己プレゼンは自他理解の深まり、自己有用感の向上、仲間づくりの楽しさ、仲間意識の高まりを図ることができたといえる。

【検証②自己実現と人間関係形成の意義を実感できた】

15回の授業を終えた学生（心身科学部2年G）の感想の抜粋（自己プレゼンを振り返った記述箇所）から検証する。

自己プレゼンの機会を頂き感謝しています。同じ教職を専攻する仲間たちと連絡先を交換できたり、自分のことを話せたりして、とても良かったです。人に対して消極的であった自分を変えるきっかけとなりました。今ではある程度人と話すことができます。教育者には、コミュニケーション能力が不可欠だろうから、これから積極的になっていこうと思います。

「人に対して消極的であった自分を変えるきっかけ」と「教育者には、コミュニケーション能力が不可欠だろうから、これから積極的になっていこう」では、今後の自分の生き方や自己実現の方向性をとらえたことが分かる。「同じ教職を専攻する仲間たちと連絡先を交換できたり、自分のことを話せたりして、とても良かった」からは、教職履修の学生との仲間づくりができた喜びを味わい、人間関係を広げたことが分かる。

また、アンケートの回答理由にある「教育実習や就活にも生きると思ったから」からは、自己実現することに生かそうとしたことが分かる。「新しい友人ができるきっかけになったから」からは、教職履修する仲間づくりのきっかけとなり、人間関係形成を築いたことが分かる。

自己プレゼンは、自他理解の深まり、自己有用感の向上、仲間づくりの楽しさ、仲間意識の高まりを実感としてとらえることができ、自己実現と人間関係形成の意義を理解するのに効果があるという結論に至った。

【今後の課題】

15回の授業を終えた学生（心身科学部2年H）の感想の抜粋（自己プレゼンを振り返った記述箇所）から今後の教師支援と課題を述べる。

通常の自己プレゼンは、ただ発表して終わってしまいます。ところが、発表後に先生は「あの子も ～ が好きだから話せばよい」と、共通の話題があった際に話すことのできる後押しをしてくれました。その時に、自己プレゼンとはただ発表するだけでなく共通の友達を見つけたりすることも目的ひとつだと知りました。先生がそういう指導をしてくれたおかげで、自己プレゼンを作っているときも共通の友達ができるといいなと、楽しみながら作ることができました。

「話すことのできる後押しをしてくれました」と「先生がそういう指導をしてくれた」からは、筆者の助言が有効であったが、学生同士が関わり合える支援のあり方と時間確保

の必要があることが分かる。また、「ただ発表するだけでなく共通の友達を見つけたりすることも目的のひとつ」では、自己プレゼンの目的のひとつである仲間意識の高まりをとらえているが、アンケート回答理由「最後のプレゼン後に集まったけれど、もっと話したかった」からは、関わり合いの時間不足により、仲間意識をさらに深める関わり合いがでなかつたことを指摘している。

これらのことを受け、次の2点が今後の課題として残った。

- ・教師支援となる有効的な手立てを明確にしておく。
- ・限られた授業時間内で仲間づくりができる効果的な時と場の設定を明確にしておく。

おわりに

コロナ禍での対面授業は、筆者も学生もマスク着用であった。学生の顔を覚えることもなく授業を終えたことに、淋しさよりも悔しさがあつた。また、コロナ禍のソーシャルディスタンスが学生同士の仲間づくりを否定しているようにさえ思え、「できない理由を考えるのではなく、できることを見つける」と心がけて授業に臨むよう心がけた。義務教育現場で担任をしている際、「仲間づくりから人間関係形成を学ばせる」という教育信条があつた。それを受け、児童生徒には「人と接するには、相手の表情を読み察することが大切。そのために相手の表情をコミュニケーション、アイコンタクト、スマイル、心の声に耳を傾けることからとらえること」と、人間関係の築き方を指導してきた。しかし、コロナ禍でのマスク着用とソーシャルディスタンスにより、相手の表情を十分に読み取れない、相手と関われないなどの状況であつた。この壁を打破するためのひとつの手段としての自己プレゼンであつた。発表の内容や仕方、話し方などを通して、マスク越しの人間性を見つめる、ソーシャルディスタンスであっても心の距離を縮める、というコロナ禍に負けない自己プレゼンにしたい思いが強かつた。

最後に、本学の令和3年度教職支援センター主催・第3回資格課程FD研究会(令和4年3/4開催)で参考になつたことを紹介し本稿を終える。筆者もパネリストの一人としてその会に参加させていただいた。本学の学生に求める課題として、他のパネリストの方々から「バイトばかりでなく授業の予習復習をさせたい」、「いい授業のできる教師になるよう育てたい」、「小学校免許の取得もできないか」、「学生の思い出にのこる授業をしたい」など参考となるご提言ばかりであつた。筆者は「できるだけ学習ボランティアを経験させたい」と発言したが、教職をめざす学生や今後の教職支援のあり方の参考になる研修会で

あった。研修会での内容をふまえ、今後の授業づくりや指導の構えの指針にすることが、筆者に与えられた責務である。来年度も微力ではあるが、教職履修をする本学の学生ために尽くしていく覚悟である。

引用文献

中学校学習指導要領（平成29年告示）解説・特別活動編